

「嫌なことを嫌だと言えない」という暴力

MSW 高岡 良江

「これまで、クリニックが怖くて名乗ることが出来なかった」とおっしゃる高橋さんが登壇されたことに、敬意を表します。

ご本人が語られたことで、見えにくいクリニックの実態が、私にも明確に伝わりました。地域生活を支える精神科クリニックで、ご本人を苦しめることがされていることに驚きます。

高橋さんが、そこで屈せず生き抜いて、要求して、適切な援助に繋がり、脱してこられたことは、すごいことだと思います。そして、今もなお、高橋さんと同じような思いをされている方がいるとしたら、「やめることができる」という何よりの証明で、希望だと感じます。医療や福祉はサービスですから、どの機関を利用するかは、ご本人が選択して良いのですから。

それが出来にくくされている現実があること、クリニックに他の選択肢があること、援助を選べることなどについての情報提供が、ご本人にどのようにされたら良いのか、まず、課題だと感じました。

大学院生の前田優子さんの講義では、集団予防接種の映像を拝見し、ショッキングでした。

子ども達は無防備で、拒否もできません。しかし、「新しい注射針で注射して欲しい」という感覚的な子どもの想いは、そもそも正しいのだと思います。それでも、「嫌だ」と言えない圧力を映像から感じました。

「恒例」が優先されることは、医療現場で今でもあるように思います。新しいことや知識を率先して活用するよりも、「前からいる人がこれまでやっていたことを覆す反逆者」のように、新しい意見を言うものを排斥する、そんな空気を、医療には他の業界よりも強く感じます。だからこそ、事実を踏まえたデータや、戦略的な伝え方が重要になるのだと思います。

精神病患者も肝炎患者も約 300 万人。その数は多いようであり、全体から見たら少数派であるので、重要視されにくいこと、被害が見えにくいこと、当事者が、嫌なことを嫌だと言えない暴力性があること、そして、当事者にとっては全てを奪うものになっていくことが、二つのお話の共通点だと感じました。その人、その家族にとっては、起きたことは 100%です。

高橋さんが駆け込んだ先のスタッフの北島沙希さん、肝炎被害者の身になって行動する弁護士の中島さんという支援者が居て、問題を個人のことでなく、他の多くの当事者がいる社会の問題として、知らせてくださったことにも感謝します。

知らないことは怠慢であり、無関心であることは罪悪。なぜなら、そういう人が大多数であれば、少数派の人は一層、生きにくいからです。私自身、心に留めたいと思います。